

第3回笑学研究所公開講座「障がいと笑い」に登壇をして

追手門学院大学笑学研究所客員研究員 大谷 邦郎

2018年3月12日。講座終了後、彼らは口をそろえてこう話してくれました。

「よき機会を得ました。ありがとうございました」と。

彼らとは、お笑いトリオ「エムズトリック」。リーダー格の元村祐子さんと、ネタ担当の森村誠さん。そして一番若い岡本康平さんの3人です。彼らは皆さんそれぞれ別にお仕事を持っておられますので、プロのお笑いタレントではありません。こうして声がかかれば、お笑いを披露して下さるいわば素人集団です。しかし今回この公開講座でもゲストとして登場して下さった彼らのコントは、大いに会場を盛り上げ、観客の笑いを誘っていました。

少しそのコントのあらすじをご紹介します。設定はレストラン。客が一人。店員に訊きます。「この店のお勧めはなんですか?」。店員は答えました。「広い駐車場ですね」と。ずっこける客。そして、こう言います。「お勧めと言えば、メニューのことやろ!」と。それに対して店員は言います。「なら、そう言って下さい」。客はしかめっ面をしながらも、こう会話を続けます。「メニューの中では、何がお勧めなのですか?」「それなら、パスタです」「では、君がお勧めするパスタを教えてください」「カルボナーラの温泉卵乗せ、ですかね」「おっ。美味そうだなあ。では、それを一つ」「それは無理!」「って、お勧めのパスタが、そのカルボナーラの温泉卵乗せ、なんだろ!なぜ無理なんだ?」「だって、それは隣の店のメニューだから。あれは美味しいですよ」「っ

て、この店のとちゃうんかい!」と言ったような内容です。

いやあ、実際本当に面白かったです。しかし、それはただただ、ただただ彼らの日常を、少しオーバーに表現していただけなのですが。そうなのです。彼らの日常こそが、お笑いの宝庫なのです。その彼らとは、一体何者なのか?その彼らの日常が、何故お笑いの宝庫なのか?実は、3人共に障害があります。元村さんと岡本さんには、発達障害が。そして森村さんには、かつては「躁うつ病」



コント「レストラン」～発達障害にまつわるエトセトラ (エムズトリック)



と言われた双極性障害があるのです。彼らはそんな自らの障害をネタに笑いを取っているのです。今回のネタのタイトルは、ずばり「レストラン」。そして、サブタイトルが「発達障害にまつわるエトセトラ」でした。果たしてこれは、オーバーに言えば「許されること」なのか？それとも「背徳の笑い」なのか？それこそが、今回の公開講座のテーマだったのです。

さてそのテーマに関して論じる前に、今回のお笑いのネタになっていた「発達障害」について、公開講座でもコントの前に筆者が講演をさせていただいたように、ここでも少しご説明をしておきましょう。

例えば「アスペルガー症候群」と言った言葉はお聞きになったことがあろうかと思いますが、「場の空気が読み取れない」「感情表現が苦手」「話を聞いて理解するのが苦手」と言った特性を持つ「自閉症スペクトラム」や、「片付けるのが苦手」「時間管理が苦手」と言った「注意欠如・多動症」、さらにLDと呼ばれる「学習症」の3つのカテゴリーがあると言われ、中にはこれらの特性が複数見られる方もおられます。メンバーの一人、元村さんが実際に、この“複合型”です。

また決して知的レベルが低い訳ではなく、高学歴の方々にも多数おられます。なかなか一言では説明しづらいのですが、厚生労働省のホームページには、この発達障害の定義をこう示しています。

「生まれつき脳の発達が通常と違う」「自分自身のもつ不得手な部分に気づき、生きにくさを感じる」

「先天的なハンディキャップではなく、一生発達しないものでもない」

「支援のあり方によって、それがハンディキャップとなるのかどうかが決まる」と。

しかし、明確な原因はまだ分かっていません。ただ、はっきりしているのは「生まれつき脳の発達が通常と違う」と言う点です。かつては、こうした特性のある人たちは、親の躰がなっていないであるとか、本人の努力不足かと言われていましたが、決してそうではないのです。ですから、この発達障害の診断を受けた方の中には「ホッとした」と言う感想を述べる方々も多くおられます。そして、そうした「発達障害」の特性のある人は、総人口の6.5%、あるいはそれ以上に達すると言われてしています。

筆者は、かつて発達障害のある人たちに話し方をレクチャーしたことをきっかけに親しくなり、2年ほど前からNPO法人DDAC（発達障害をもつ大人の会）の監事を務めております。それだけに多くの当事者の方々と接してきましたが、そこで驚いたのが、彼らの中の何人かが「人が笑っているのに、自分は何が可笑しいか分からない時がある」と話したことです。「笑いが分からない時がある」。これは衝撃でした。笑いは万人にとって人間関係の潤滑油だと思っていただけに、その常識が打ち砕かれた気がしました。しっかりとしたデータはまだとっていませんので正確なことは言えませんが、グループインタビューなどでは、半数を超す発達障害の当事者たちが、「笑いが分からない時がある」とそう言います。しかし、これは彼らの特性を考えれば当然のことかも知れません。と言うのも、彼らはまず「話を聞いて理解するのが苦手」で、「表情や身振りを読み取るこ



講演「ご存知ですか？ “発達凸凹”」（大谷邦郎）

とが苦手」「他人の感情を考慮するのも苦手」だからです。ですから言葉の裏に潜む「笑い」に繋がる「感情」や「ニュアンス」が分からないことが多いのではないのでしょうか。例えば、彼らに「早く帰りなさい」と伝えてもなかなか理解してもらえないときがあります。「〇時には帰りなさいね」と具体的に指示する必要があります。また、「このお鍋、見ておいてね」とお願いをすると、沸騰して出汁が吹きこぼれていても、じっとただ見ているだけ、と言うこともあります。「なぜ、

ガスを止めてくれなかったの！」と声を荒げても「見ておいてね、と言ったじゃないか」と反論され、思わず絶句する始末。それだけでなく「あなたは、エ・ラ・イわね～」と皮肉を込めて言ったとしても、真顔で「どうもありがとうございます」と言われる可能性すらあります。

さらに、こんなこともよく聞きます。「恋愛が苦手」だと。「付き合う時、誘う時、それはどんなタイミングが分からない」「恋愛のその定義を教えて欲しい」「何回目の食事で告白したらいいのだろうか？」「恋愛と言う“目に見えないもの”は不安です」と。少し悲しいけれど、やはり何処か可笑的。そう。これが彼らの日常に実際起こり得ることなのです。ほら、彼らの日常は笑いの宝庫だと言うことが理解していただけたかと思います。

さあそこで、今回の公開講座のテーマに戻りましょう。障害を笑いのネタにすることは許されることなのでしょうか？

講座の中で笑学研究所所長の高垣先生もご紹介されておりましたが、落語の中には障害者を扱うネタもいくつかあって、かつて寄席では演じられていたものが、テレビなどのオンエアーからは、いつの間にか“排除”されていったものもあります。例えば古典落語でかつては上方演目の代表作の一つと言われた「景清」と言うお噺があります。しかし、最近はとんと耳にしません。それは主人公が視覚障害者で、その主人公に向かって「その方、悪業因縁深きゆえ、その方の目は治らぬ」と言った台詞があるからです。ですから、筆者もこの「障害と笑い」は実にナイーブな問題と捉えていたのですが、実は当事者にとっては、そうでもなかったのです。

もう一度、今回コトを披露してくれた「エムズトリック」について説明を加えましょう。彼らがトリオを組んだのは2016年4月のこと。Eテレが放送している障害者のためのバラエティー番組「バリバラ」が主催した障害者の中で誰が面白いかを決める「SHOW-1 グランプリ」に出場したいがため。実際、出場を果たし、その回では、9組中7位の成績を取っています。また同年の11月に行われた大型人権啓発イベント『ヒューマンライツフェスタ東京 2016』にも出演しています。なぜ、彼らがこうしたテレビ番組やイベントに出場したかったのか？それは、この講座の中で



パネルディスカッション
(左から 高垣、大谷、元村、森村、岡本)

も次のように語ってくれました。

「難しい言葉を使って説明するのではなく、笑いながら障害のことを分かってもらいたいからです」と。またこうも言います。

「笑ってもらえたら嬉しい」。

一方、こうも言います。「無視されるのが一番辛い」と。ならば、大いに笑ってもらって、その一環で、障害に関しての理解を進めたいと願っているのです。なるほど。障害をネタとする笑いを過度にタブー視する必要はないようです。筆者がかつて行ったグループ

インタビューで「障害をネタに笑うことは許されるか」と問うと、やはり大半は「ケースバイケースだ」と答えましたが、「許されるものではない」と言う回答はゼロで、反対に「大いに笑って欲しい」と言う回答が、「ケースバイケース」と言う回答に迫るほどの数を占めていました。

公開講座の途中、彼らが言った一言が記憶に残ります。「笑ってはいけないと言う人たちの多くは、健常者ですよ」と。今流行りの言葉で言えば、過度な“忖度”だったのかも知れません。

但しです。高垣先生も、エムズトリックのメンバーをパネラーとしたパネルディスカッションで何度かお聞きになっておりましたが「他の障害、例えば発達障害の演者が身体障害をネタにするのはどうか？」と言う質問に関して、彼らも、「他の障害の方々の苦労は分からないのでネタも書けないと思うが、書けたとしてもそれは笑いの種類が変わってくるのでは」と答えるなど、あくまで自分の障害をネタに演じ、それが自らの特性の理解に繋がるのであれば、「こうした笑いも“あり”だと思う」と言うのが彼らの意見のようでした。もちろん、それでも人によるが、と言う注釈付きではありましたが。

さて、今回のこの公開講座を通して感じたことは、改めて笑いは難しい、深遠だなど言うことでした。笑いは時に人を傷つける「刃」になります。しかし、その刃だと思っていたものが、別の人にとっては、実に温かな花一輪のように受け止められている可能性もある。

笑いはかくも複雑です。

ただ、当日の会場は実に和やかなムードに包まれていました。これも笑いの力かと。やはり笑いの「プラスの面」の力の方に光を当てていきたいものだと、改めて思わせてくれた公開講座でした。ご参加いただいた皆様、ご準備いただいた関係者の皆様、本当にありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。(了)



次なる
茨木へ。
茨木市立・追手門大
平成30年は市制施行70周年

茨木市×追手門学院大学 連携講座
追手門学院大学 第3回笑学研究所公開講座

現代未開 追手門
130年の伝統を革新の力に

障がいと笑い

— 笑って、知って、理解して —

笑う門には
福来る

「笑い」はコミュニケーションの潤滑油。

しかし、時には人を傷つける場合も。特に障がい者や障がいをネタにした笑いはタブー視されることもあります。本当にそうなのでしょうか？そこで、自らの障がいを笑いのネタにコントを披露している当事者をお呼びして、「障がいと笑い」、なかでも、「見えない障がい」と呼ばれる「発達障害」と笑いについて楽しく考えます。まずは知って欲しい、それが当事者たちの希望なのですから。

プログラム

17:30	開会
17:35	講演「ご存知ですか？“発達凸凹”」 NPO法人発達障害を持つ大人の会 監事 大谷 邦郎
18:10	コント「レストラン」 ～発達障害にまつわるエトセトラ～ エムズトリック
18:25	パネルディスカッション パネリスト：大谷邦郎、エムズトリック コーディネーター：笑学研究所員



大谷 邦郎



エムズトリック

難しい言葉を使って説明するのではなく笑いながら障害のことを分かってもらおうと、2016年4月結成。初出場した障害者のためのバラエティー番組 NHK「バラバラ」の第6回SHOW-1グランプリでは9組中7位の成績を収める。2016年11月に行われた大型人権啓発イベント「ヒューマンライツフェスタ東京2016」にも出演。発達障害の元村と岡本、双極性障害の森村と、3人とも体調に波があるため、健康第一に今後も無理のないペースで活動を継続していく予定。

2018年3月12日(月)

参加無料

時間 17:30-19:30(開場17:00)

会場 茨木市立男女共生センター ローズWAM
地下2階フムホール

定員 150名
申込先着順
定員になり次第、締め切らせて頂きます

申込方法

①お申し込みフォーム(右のQRコードからお申し込み下さい。)

②メールまたはFAX
件名「3/12公開講座」、氏名、住所、電話番号、所属(任意)を記入の上でご送信ください。
メール/showgaku@otemon.ac.jp FAX/072-665-5034



お問い合わせ

追手門学院大学 笑学研究所
TEL/072-665-5024



大阪府 茨木市
Ibaraki City



歴史にながった豊実家がはまる
追手門学院大学